

「みんなで話そう！ 新しい文化施設のこと」開催報告

1 本プログラムについて

仙台市では、音楽ホールと中心部震災メモリアル拠点の複合施設を青葉山エリアに整備する計画を進めています。この新しい文化施設の設計や運営指針の策定にあたり、障害のある方、その活動の支援に取り組まれている方からの生の声を伺うため、グループディスカッションを中心とした本プログラムを開催しました。なお、本プログラムは、第 7 回障害のある人と芸術文化活動に関する大見本市「きいて、みて、して、見本市。」内の企画の1つとして実施しました。

[日時]

令和 7 年 2 月 2 日(日)午後 2 時 30 分から午後 4 時 30 分（開場：午後 2 時）

[場所]

せんだいメディアテーク 1 階 オープンスクエア

[参加者数]

ディスカッション参加：25 名 聴講者：約 40 名



大見本市会場全体の様子



ディスカッション会場全体

2 ガイダンス

最初に本プログラムのコーディネーターを務める本江正茂氏(東北大学大学院工学研究科都市・建築学専攻准教授／(仮称)国際センター駅北地区複合施設整備アドバイザー)より、本複合施設整備の背景や経過について解説いただきました。

[本江氏]

- 「音楽」と「災害」をテーマにした新しい文化施設(複合施設)をつくることになった。
- 仙台には、素晴らしいオーケストラがありストリートジャズフェスティバルがある。アーケードに楽器屋がある。ピアノ教室、バレエ、バンドもある。仙台は音楽が盛んな街だが、ここが音楽の中心施設だというのが無かった。
- また、2011 年には災害がこの街を襲った。原子力発電所の事故や津波等を忘れてはいけない。東日本大震災だけではなく、その後も日本各地が災害の被害を受けている。災害が起こらないようにはできない。災害が起こる前提で暮らす。災害が起きたとしても、その被害を最小限にして、乗り越えることが必要。そのためには「誰かが上手くやってくれる」というのではなく、全員が技や知恵を持つことが重要であり、それを皆で共有することが必要。それを仙台では「災害文化」と呼ぶ。
- 震災後すぐ、音楽家の人たちが、自分たちにできることはないかと考え、3 月26日を皮切りに体育館の避難所や復興公営住宅など様々な場所でコンサートを行った。言うのは簡単だが、始めるのはとても勇気が必要だったはず。家族がまだ見つかっていない人もたくさんいた。家が大丈夫でも、水もガスも止まったままという人たちがいっぱいいた。そんな状況で、音楽どころではないと思われるかもしれない、と。
- いざやってみると、多くの人が集まり音楽を聴いた。傷つき、悩んでいた人に、音楽を聴いてもらったり、一緒に踊ったりすることで、心が開き、一つになることができた。
- 音楽と災害を組み合わせ、新しいことを創り出そうとするのは仙台らしい。仙台からしか始められないことだと思う。仙台でしかできないとは言わない。うまくいけば、他のところでもやってほしい。
- では、どんな部屋があり、どんな考え方で作ればいいのか。お金はいくらかかるのか。どんな建築を作ったらいいか、建築家に提案をよびかけた。一般的な公共建築物のプロポーザルではせいぜい3つか4つ、多くても10件ぐらいの案しか出てこないが、この施設では、音楽と災害の複合施設をつくることに意味を感じてくれたのか、69件という多くの提案が集まった。
- その中から選ばれたのが、(株)藤本壮介建築設計事務所の提案。彼の提案は、大ホールを真ん中に据えて、それを取り囲む花びらのようにたくさんの諸室が備えられている。そこでは様々な人が、音楽と災害に関する活動を行う。音楽を練習したり、準備をしたり、衣装を作ったりする。子どもと一緒に踊ったり、ワークショップの準備を行っている人もいるかもしれない。とても賑やかなスペースになる。
- その施設でも特別な瞬間がある。3 月11日の特別なコンサートの日かもしれない。もしくは、同じ災害で苦しんでいる地域があれば、その地域に向けてメッセージを発信することもあるかもしれない。いつもは閉じている音楽ホールが特別な瞬間には開けることができる。いつもはそれぞれに多種多様な活動をしている場所が1つになる。音楽と災害の関わりを仙台か

ら発信する意味が生まれてくる。単純だが力強い、新しい施設の形だと僕は思う。

- 見たことがない施設だから「大丈夫だろうか」と心配する人もいるだろう。現在は、藤本氏から提案を受けて、基本設計を固めている段階。
- 「文化芸術」と「災害文化」の融合を仙台で生み出そうとしているのが、この施設の大きな狙い。今日集まっていた皆さんには単なるお客さんではなく、これからできる施設のことを一緒に考える参加者になってほしい。こんな施設なら行ってみたい、どうせ作るならこういう施設にしてほしい。いろいろな考えがあると思う。それを教えていただく場になる。



本江氏によるガイダンス

次に、仙台市青葉山エリア複合施設整備室長佐々木裕一郎より、本施設の概要を説明しました。
[佐々木室長]

- (仮称)国際センター駅北地区複合施設は、仙台市の文化芸術の総合拠点となる「音楽ホール」と、災害文化の創造拠点となる「中心部震災メモリアル拠点」からなる。
- 本施設は、地下鉄東西線 国際センター駅の北側「せんだい青葉山交流広場」がある場所に整備する予定。
- これまで「基本構想」や「基本計画」をまとめており、今は、基本設計を進めている段階。令和13年度の開館を目指している。
- この複合施設の基本理念は、「人・文化・まちを育む創造の広場 ～文化芸術と災害文化がつなぐ 人と人、過去と未来、仙台と世界～」。文化芸術と災害文化の力で、たくさんの人が出会い、繋がることで新しい文化が生まれ、多くの方が訪れる施設を目指している。
- 施設の整備にあたり大事にしているポイントは3つ。1つ目は、いつ来ても居場所があり、文化芸術と災害文化との出会いのある開かれた施設づくりを行うこと。2つ目は、年齢や心身の特性などに関係なく、どんな方でも安心して利用できるユニバーサルな施設とすること。3つ目は、市民の方も、プロの方も、さまざまな活動ができる「みんな」の施設にすること。
- 大ホールは、楽器などの生の響きを重視した2,000席規模のホールで「コンサートホール形

式」と「劇場形式」の 2 つの形に変えることができる。コンサートホール形式のときは、舞台のまわりを客席が取り囲む「サラウンド型」になることが特徴。その他、350 席の小ホールや、文化芸術のエリア、災害文化のエリア、広場のエリアとして様々な諸室整備を計画している。

- 建物を作るだけでなく、この施設では様々な事業も行っていく。音楽ホールでは、魅力的な舞台芸術作品の上演に加えて、まちに賑わいを生んだり、誰もが輝ける社会となるよう人材育成に力を注ぐ。震災メモリアル拠点では、「災害と人との関係を知ること」、「災害文化を創り、定着させ、世界中に広める」事業を通して、災害に強い人と地域づくりを目指す。
- 文化芸術と災害文化がそれぞれに事業を行っていくだけではなく、文化芸術の力と災害文化の力を掛け合わせた取り組みも行っていく。

※ 詳細は「当日配付資料」のとおり



仙台市からの行政説明

続いて、スクリーン上に本日のディスカッションのテーマを表示し、本江氏より、ポイントを説明していただきました。

[表示内容]

【この施設が重視するポイント】

- ① いつ来ても居場所があり、文化芸術や災害文化との出会いのある開かれた施設
- ② 全ての人が利用できるユニバーサルな施設
- ③ 市民もプロも「みんな」の創造活動を支える施設

【ディスカッションのテーマ】

このような「みんなのための施設」の実現のために大切なことは？

- ハード(建物の設計)に関すること
 - ソフト(運営や事業)に関すること
- どちらの意見も OK

[本江氏]

- 複合施設はみんなのための文化施設。建物もそう、使い方もそう。肩肘を張らずに、自由に皆さんの意見を教えて欲しい。今日はいろんな方が参加している。当然、様々な意見がある。

そのためお互いの意見は尊重すること。

- 今後もこのような意見を出し合う場を設定する。今日だけではない。いい意味で無責任に発言していただいて構わない。
- 聴講者の皆さんも複合施設に望むことについて、自由に意見を述べて欲しい。会場後方にボードを準備している。ペンと付箋を使って、どういう施設になってほしいか意見を書いて欲しい。

3 ディスカッション

ディスカッションには視覚や聴覚に障害のある方、肢体不自由の方などを含む25人が参加しました。4つのグループに分かれ、「こんな施設だったら足を運びたい」「こういう環境なら鑑賞や活動がしやすい」などをテーマに話し合いを行いました。

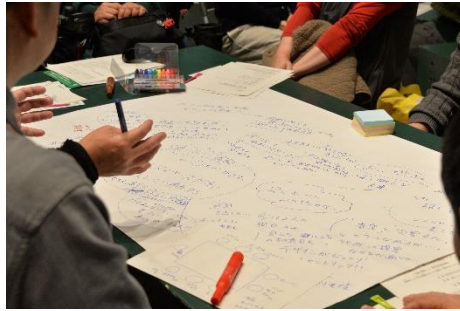
各テーブルには進行役としてファシリテーターがつき、施設の基本設計者である(株)藤本壮介建築設計事務所のスタッフや市の職員もオブザーバーとして同席しました。また、手話通訳者などが議論の進行をサポートしました。

同事務所代表の藤本壮介氏や、本複合施設整備アドバイザーの本杉省三氏(日本大学名誉教授・劇場計画研究者)も参加者の議論に耳を傾けました。

【ファシリテーター】

- ・及川多香子氏(特定非営利活動法人アートワークショップすんぷちょアートコーディネーター)
- ・小濱昭博氏(演出家／俳優)
- ・千田優太氏(一般社団法人アーツグラウンド東北代表理事)
- ・桃生和成氏(一般社団法人 Granny Rideto 代表理事)





ディスカッションの様子

4 発表・まとめ

各グループのファシリテーターに、ディスカッションで出た意見を発表いただき、本杉氏、藤本氏からコメントを貰いました。

【グループ 1】

[ファシリテーター：及川多香子氏]

- どんな施設がいいか。まずはコンセプトや概念的なものと、具体的なことの両方について意見を出してもらった。
- 例えば「世界中の人が訪れる、あるいは訪れたいと思える、仙台市民にも愛される施設」というコンセプトを実現するためには、視覚に障害をお持ちの方のために点字ブロックやスロープは必須だろう。あるいは施設の中で自分がどこにいるのか迷ってしまうのではないか、見失うのではないかという不安に対して、建物のレプリカのような触れられるものがあって、今ここにいるということが指で確認できるものであるといいという意見が出た。
- また、今後の社会の変化に合わせてフレキシブルに空間の広さを変えられることを望む声もあった。
- 概念的なところで言うと伝統文化や民謡などの仙台、日本の文化を知ってもらえる発信力がある施設が良い。音楽ホールは、西洋音楽と思われがちだが、そうではないものもいいという意見や、エントランスに入ったときに、災害と音楽の融合ということが分かるという意見が出た。



発表の様子(グループ 1)

[本杉氏]

- 今のテーブルの話で出た「愛される施設」について。建物は物質的なものなのでだんだんと老朽化して、最後は壊される運命にある。しかし、僕がいろんなところで言っているのが、皆さんの愛着は減らない。むしろ右肩上がり伸びていく。皆さんから愛される施設になることが、その施設を生き続けさせる一番の原動力。その言葉が聞けたのはとてもよかった。
- “さわれる”という話があった。実際に今でもある。「ミューザ川崎」という施設では、さわれるホール内部の模型がある。目の見えない方でも居場所がわかる立体的な案内マップのようなもの、そういったものが用意されているところもある。それらはこれから作る仙台の複合施設でも実現可能かと思う。

[藤本氏]

- 僕もテーブルに参加させてもらった。皆さんの話を直接聞くことで、文章とは違う実感が伴った。
- 「災害文化」は、僕も、市の方々も、どういうものかと考え始めているところ。世界では、なかなか災害を文化としてとらえられていなかった。しかし、仙台ではそれを培ってこうとしている。設計と同時進行で、「災害文化」とは何かを考えている。未来の子どもたちにそれを引き継いでいくために、一緒に考えていきたい。
- 音楽ホールと「災害文化」が一体となっている建物。入ってそれがすぐに分かるのはとてもいい。でも、どうやってやるか。大きな問いをもらった。入った瞬間に、わっとなって終わりではなく、来るたびに思い出す。それが一体となっているのが素晴らしい。

【グループ 2】

[ファシリテーター：小濱昭博氏]

- 我々のグループは様々な特性を持った方がおり、非日常を楽しみたかったのに「介助者がいない」などの理由で楽しめない人がいかにいるか、学ぶ場となった。その中で一番大切だなと感じたのは、施設が「安心できる場所」であること。そのためにはハード面だったり、特性のことを把握している職員が常駐していることや、仲間がいることが必要だろう。そんな中で安心してチャレンジできる場所だといい。様々な特性の方が参加し、やってみたいことを実行できる、そんな様々な人を包括できる建築にしてほしい。
- 料金を安くや、メンテナンスしやすい、トイレがキレイといった設備の話をしたときに、まるで「避難所」みたいだなという意見が出た。誰もが安心して過ごせる「避難所」のように配慮の行き届いた場所になってくれるとよい。
- 最後に、我々のグループには30歳以上の方しかいなかったため若い人の意見を聞く場所も仙台市に用意してほしいとの意見もあがった。



発表の様子(グループ 2)

[本杉氏]

- メンテナンスしやすいというのは大事。

[藤本氏]

- 僕も最初にご意見をいただき、メンテナンスしやすいことが大事だと感じている。そうすることで愛着を持って使ってもらえることにつながると思った。

【グループ 3】

[ファシリテーター:千田優太氏]

- グループ 3 では、自分はどうやって使いたいかの意見を共有した後、3 つの議論ポイントを踏まえて意見交換を行った。
- 皆にとっていい施設は何か、意見を出してもらった。グループ 2 と似ているが、安心できる場所になるといい。耳のきこえない方同士の話のとき、ついつい大きい声になってしまう。図書館では怒られてしまうため安心して会話ができない。だからこそ、この場所が大声を出しても大丈夫な場所になると安心できる。
- 小さい子供が自由に遊べる場所も安心できる。裸足でもいい場所。
- 困ったときに助けてくれるような人に優しい施設になるとよい。利用者も優しいといい。
- 「災害文化」に関しては、どんなことがあっても変わらず開館してくれている場所になるとよいと考え、命名したのは、「約束の場所」。大きな災害があったとしても、約束して出会うことができる場所になるといい。
- 建物自体ではないが、車で行くときに、あそこの道路に行く道が 1 本しかなく細いので、混雑しそうだという意見が出た。いろんな行く手段があればいい。



発表の様子(グループ 3)

[本杉氏]

- 大事な話だと思ったのは、迷わないような計画・場所にしてほしいという意見。これは設計側で考えてもらって、実現してほしい。

[藤本氏]

- 注文が多ければそれだけ嬉しくなる。今話してもらって、それぞれやりたいことをやりたいように、振る舞いたいように振る舞えることが安心につながり、それがまた行ってみたいにつながる。
- 音楽ホールなのに、その周りがガヤガヤ賑わっているというのは今まであまりなかった。でもそんな場所が作れば魅力的だなと感じた。なんとかその両立をしていきたい。

【グループ 4】

[ファシリテーター: 桃生和成氏]

- グループ 4 は最初に説明を聞いた率直な印象として「わくわくする」などポジティブな意見が多かった。グループのメンバーは普段、設計、デザイン、公共施設の職員などをしており、いろいろな視点で話ができた。
- 見た目のカッコよさや驚きを出発点に、一方で使い勝手はどうかということが論点になった。ビジュアル的にカッコいいのもいいが、利用者としては使いやすさが大事。そのバランスをどうとるか。
- どうしても建物の話が先行してしまい、実際に使う人、管理運営に関する議論がいつも後になってしまうことが課題だという意見も出た。今日のような場をもっと設けたらいいかと思う。
- また、開館後のスタッフの専門性について、ハード部門とソフト部門、そのどちらにも精通しているスタッフを置けることが理想であるため、運営サイドに誰を置くかもポイント。限界もあるだろうが、すべての要望にどう応えるか。仙台では、公共施設でそういう対応のできるスタッフが少ないという意見が出た。



発表の様子(グループ 4)

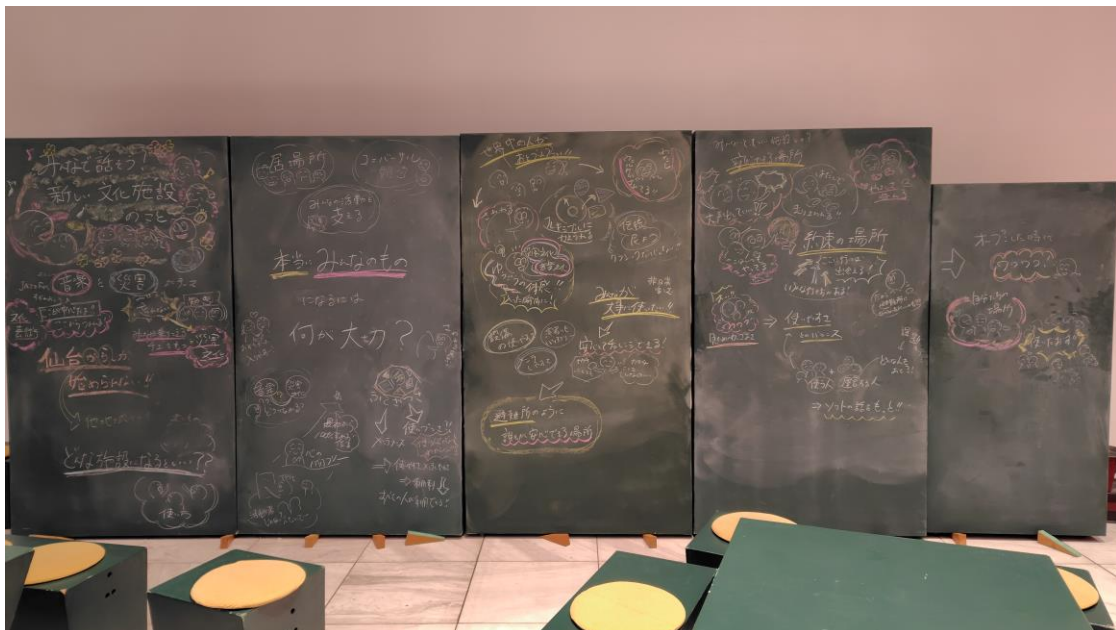
[本杉氏]

- 「わくわくする」というのは僕らも感じた。そのわくわく感をバージョンアップしたい。皆さんも期待してほしい。一方で、どんな人たちにとっても使いやすい場にしていかなければならないと思った。使い勝手ばかりでも困るが、わくわく感と使い勝手のバランスがとれるようにしたい。

[藤本氏]

- 設計側でも気になっているのは、運営の方がどのタイミングで建物にかかわるか。一緒になってつくりあげていくことが大事と実感した。設計側にフィードバックいただくなかで、運営と設計が両方で解決していくことが大事。これは、市の方とも話し合いながら。運営者が最後に決まるという方法でないといい。

グラフィックレコーダーの高田麻由氏に、発表の要点を黒板にまとめていただきました。



ディスカッションの要点

5 総評

[本杉氏]

- 数年前、障害者の芸術活動推進に関する法律もできた。今までは「やったほうがいい」だったことが「やらなければならないこと」になった。鑑賞だけでなく、創造・発表といった一連の活動ができる場になる。特にこの施設は「創造」をキーワードに据えている。
- 一方、劇場はもともと障害者にとって居づらく、使いにくく、居心地はよくない。例えば客席は階段も多く、自分の希望した場所に座りにくい。講演が始まると暗くなり、避難の時は非常に危険。それらを踏まえると障害者の方の席は限られているのが現状。
- それでも、少しずつ建築(ホール)側でも変わってきており、これまで車いす用の客席は中通路や客席の最後部しか確保していなかったが、最近ではそうではない席にも車いすの方のための場所を積極的に作ろうとしている。
- 今後、ハードについてはだんだんと改善されていくし、複合施設が出来る頃にはそうなるべき。今回のような場が今後も継続的に続いていけばいいと思うし、皆さんからの期待に応えられるような施設ができればいいと思う。



本杉氏

[藤本氏]

- 皆さんの顔を拝見しながらお話を直に聞いて、実感として、僕らの責任とやる気につながった。意見も、そういう視点もあったのか、と思った。設計にできるだけ盛り込みたい。
- 工事期間が3～4年あり、その間も設計は決まっても、運営のことについては継続して話せる場が続くといい。オープン時、皆がこういうふうに使おう、とわくわくできる、自分たちのものとして使えるようになっていけば良い。遠慮なく使い倒してもらえるようなものにしたい。
- 今日すごくいいなと思ったのは、この空間(せんだいメディアテーク オープンスクエア)でいろんな方が行き来している。いろんな音が聞こえるのもまたいい。同時に音楽が聞こえてきたり。そんな場所ができればいい。
- メディアテークの向こう側、歩いて2分のところに事務所を借り始めた。これから家具とかを入れていく。気軽に来てもらって、ワークショップも行えるような場所にしたい。ぜひ来てほしい、酒を飲みながらでも、お茶を飲みながらでも、話を継続していきたい。



藤本氏

[本江氏]

- ディスカッション中に印象的だった意見を紹介する。
- バリアフリーの話はロビーから客席に行くまでのことを考えがちだが、これからの時代は演者にだってバリアフリーが必要だ、という意見。そうすることで楽屋からステージに出ていって、ふさわしいプレイをすることができる。そのように、誰にでも開かれている場であれば困る。
- 皆さんで使ってもらえる施設になれるよう我々も努力をしていく。そのためには、気が付かないことが沢山あるので、これからも皆さんから意見を伝えてほしい。



本江氏

6 「あそびの場」の開設について

本イベントの参加者等が立ち寄り、休憩したり創造的な体験をしたりできる「あそびの場」を開設しました(運営:特定非営利活動法人ワンダーアート)。

今回会場に飾られた個性豊かなハッピードールは、ホスピタルアーティスト高橋雅子氏(特定非営利活動法人ワンダーアート代表理事)が平成18年から続ける「ハッピードールプロジェクト」で、たくさんの人の手で作られたものです。参加者は、ハッピードールの制作やお絵かきを楽しんでいました。

(ハッピードールプロジェクトについて)

<https://www.masakotakahashi.website/happy-doll-project>



あそびの場の様子

7 いただいたご意見の紹介

(1) グループディスカッション参加者からの意見

[グループ 1]

(グループワークの中で参加者が付箋に書いた意見)

- 最初からコマ切له的な個室で仕切るのではなく、大小等に対応できる自由度の高い設計にして欲しい
- 音楽と災害文化との融合がわかる施設にして欲しい
- プロセスが見える仕組み。建築・プログラムの途中がわかる
- 中間的な進行開示がほしい。現在何の為の設備なのかを示す
- 仙台市民に愛される施設
- いろいろな条件に合った施設
- 青葉山周辺の景観と協調性のある建物の外観に配慮して欲しい
- 他の災害展示施設との連携機能
- 世界中の人が訪れる(訪れたいと思う)施設
- 仙台、日本の文化を知ってもらえる発信力のある施設
- たくさんの人が集まる施設
- 仙台出身のプロの演奏家がたくさん生まれるホール
- 緑彩館との連携を取る
- 子どもたちだけでなく若者たち向けのプログラムがあってほしい
- VR
- 民謡
- 伝統芸能
- 能 うたい
- 音響フレキシブル
- 防災の最先端
- 客席の物入れの箱や、前の席に杖をかけるところがほしい
- 階段の手すりがほしい
- 全面禁煙
- パーティースペース
- オーケストラの客席は多様な並び方

- 客席は階段でなく、スロープに。段差がない方が良い。なだらかなスロープで歩きやすいように。
- 全体をみれる、さわれる
- 市民協働スペース
- ソーラーパネル
- NPO の施設
- 点字ブロックがほしい
- 席表示を点字で
- 視覚障害者のための音声ガイド、点字表示を
- メモリアルホール、触れる展示物、音声の説明を
- 自分がどこにいるかわかるレプリカ

(ディスカッションの中での主な意見)

- 音楽ホールとメモリアル拠点の融合という点が、施設に入った瞬間に「その手があったか！」と体感できるようになっていると良い。そうしたインパクトや第一印象がとても大事。

[グループ 2]

(グループワークの中で参加者が付箋に書いた意見)

- 音楽、災害の拠点を学都仙台に、子ども財団、支援学校にとっても自分事に(日常使いできる仕組み)
- 仙台市職員にとっても自分事(文化観光局がやっていることにしない。市教委等にとっても自分事に)
- 一見さんお断りにならない自分事を残せる機能
- 施設として発酵(成熟)していく施設
- メンテナンスしやすい建物→変更しやすい
- 改修しやすい
- コンテナハウスのように部分交換できる
- 地元を大切に
- ロケーション、周辺環境
- 仙台市の説明にないけど・・・「広瀬川との近さ、融合」は？
- 県美術館「地元のアーティスト展示する機会ない」
- ふらっと入れる
- いざ完成したら「入りにくい」がよくある
- カフェが高い？(青葉の風テラス、緑彩館)
- アマチュアアングラ(金がない)
- 落ち着く雰囲気
- オブジェ
- 特色がほしい

- 差別化 違いや特徴を出さないと
- 県民会館との連携、すみ分け
- 2,000 人規模って狭いような・・・
- 利用料は低価格をお願いします
- カフェ、ショップにも理解して。配慮不要な人へも理解周知
- 練習する場所がほしい
- 路上演奏、ストリートピアノ練習できる空間
- 色、ブロック≠デザイン重視 smt はそれも踏まえて
- 意見を聞く
- 視覚障害も多様
- 標準的とはいかない
- 案内が必要！！
- カウンターに常駐していて
- 触れるものがほしい(特に展示)
- コミュニケーション、人つきあいの練習→イベント
- 発達障害当事者どうしが集まるといいな
- 動線にも配慮
- 気持ちが変わえられる通路 明・暗
- 災害 今できることを可視化
- 皆にとっての災害対策
- 切り替え「冷たい」「温かい」 触れるオブジェ
- 遊びと学びが重なる場所「子どものためのスペース」
- 日常と非日常 バランス
- 日常と切り離す装置 スイッチ
- 障害 はじめからできない× できなくなっていく
- できる／できない→やってみたい コーディネーター(いつもいる)
- 本人がやってみたいと思い、あとおしすることが大切
- うまくケアできるスタッフ、空間
- 興奮を落ち着かせる、大声を出してしまう「緑・水辺」
- 特性 感覚の配慮
- 暗さ、明るさ
- 座布団貸し出し
- ひじかけ× ひじかけの無い、2,3 人席
- ガラス張りの鑑賞室 センサリールーム
- ガラス張部屋明るめに
- 要配慮者への配慮の周知
- 事前に確認したい
- 通路席入口近くの席の確保(自由席)
- 言葉では「誰でもOK」× 運営の自己満にならないように

(ディスカッションの中での主な意見)

- 子供同伴で観劇しやすくしてほしい(劇場の椅子の肘掛けの有無、劇場への動線に関する照明など空間の配置(暗すぎるといけなくなったりする、出入りしやすさ、など)。
- 視覚障害のある方は、逆に静かで閉ざされている空間の方が安心する。
- クールダウンできる空間があると良い。
- 自然との調和が取れるといい。
- 障害をお持ちの方がパニックを起こしたりする際、逃げる先があると良い(緑のある場所、水のある場所、など事前と一緒に落ち着ける場所、など)。

[グループ 3]

(グループワークの中で参加者が付箋に書いた意見)

- 笑ってられる場所
- いろんなことが同時にできる場所
- ホールのスペースに見守りスペースがあったらいいな
- あそぼっちゃ(あそぼう)楽しくできる
- どの部屋にもホワイトボードがあって好きなこと、かいてのこすこと
- シンプル「ある時一体になる」
- 文化芸術の総合 創造の広場
- よはく
- フェーズフリー
- そこに人がいるのに人目をさけてられるような
- そばにいてもじゃまにならない
- やってる人がつながりやすい、交流しやすい
- 子どもが安心して大人になっても通いつづけられる、にげられる
- NGがない。照明も自由に吊り込める
- こうなるといいながいつもある
- 災害の時もかわらずある！！
- 発災のときもふだんと同じく使えるし、外からもやって来れる、つどえる、つながれる、いつもとかわらない
- 約束の場所
- たばこ吸いたい
- お弁当デート
- 働いている人がやさしい、あたたかい
- ホームレスの方と出会える場所
- 深夜に忍びこめる
- 裸足で走り回れる場所
- 日向ぼっこできる場所
- 世界中の人たちと出逢える

- 自分の作った何かを飾れる
- 会話しやすい部屋のつくりと雰囲気
- 精度の高いコストコントロールでスケジューリング
- 直感的に分かるルートと見つけやすいサイン
- 1つの施設の中に、いろんな居場所をつくる
- ここでしかできない体験をしたい
- 車いす利用者も安心して来れる
- 誰も迷わずに目的地に行ける
- 観光地として紹介できる
- リラックス、くつろぐことができる
- 障害を持つ方の避難訓練大事
- 子どものみ利用OK(防犯カメラ付き)
- 手話や英語ができる職員が常駐
- 日本語がわからなくてもわかる施設
- 迷子にならない仕組み
- 個室
- 大声OK！(太鼓とか)
- 好きに使える部屋
- 高齢の両親を安心して連れてこられる所
- 介護トイレとか
- 個室ルームでゆっくり鑑賞できる
- 夜のコンサート、仕事終わりに
- 芸術文化を通してつながりがすぐつくれる
- 市民で作った新しい音楽祭とかやってほしい
- 案内が多め 手話できる 声かける 見守り
- ひとりだけでも来られる
- やってる人がつながりやすい

(ディスカッションの中での主な意見)

- 誰もが自由に作品創作ができるアトリエのようなイメージの場所があるといい。公園のような本当に無目的な空間であったり、特定の人が集中して作品創作する従来のアトリエのようなものであったりではなく、オープンアトリエのようなイメージ。
- 障害者は地域の避難訓練には出づらい。この施設で避難訓練のイベントのようなことができないか？

[グループ 4]

(グループワークの中で参加者が付箋に書いた意見)

- スタッフの対応能力・知識、オープンまでの準備
- 手話通訳 etc

- 機材があっても使い方がわからないこともある
- 専門スタッフ 常駐必要→せめてある程度障害者対応に慣れている人が入ると良い
- 多目的→『無目的』にならないように
- 色んな立場の方々に使いやすく愛されるものに
- 客だけでなく演者側へのユニバーサル対応
- 施設ができることが楽しみ。ただ、話し合いが大事！！
- ユニバーサルの美しさ
- 使う人が大事
- 「音楽」と「災害文化」とどうつながるか……。行政への提案 なかなか通らない
- デザインがびっくり
- エキセントリック
- 使いづらさ。運営側も大変
- 聞こえない人、色んなハンデを持っている人＝この前提でのイメージをもっと
- 歩ける人の視点のみ
- 意見を出したい
- 子どもたちの意見も
- ロビーがせまい
- デッドスペースが多い
- 見えにくい席がある
- 車イスとおりにくい
- トイレ重要 ひろびろトイレ
- ピクトグラムなら(失語症)
- アクセシビリティ
- デザイン
- イベント
- 車イス OK
- 盲導犬 OK
- この施設が有事の際にどのような役割になるか
- 平時と有事
- 太白区の施設(スペースの開放。子どもと親と一緒にイベント参加できる)
- 福島の避難訓練(被災者ロビーで寝泊まり。ブラインド訓練→どこで何が起きるかその時までわからない)

(ディスカッションの中での主な意見)

- 複合施設は、設置の目的が多目的になりがちで、結果、何をしたい場所かがわかりにくくなる。多目的は無目的とよく言われる。
- 障害のある方(受益者として、表現者として)の利用についてハードで対応できることの限界がある。スタッフを含む運営体制(ソフト)とセットで考える必要があるのでは？
- 障害のある方がどのようにすれば音楽ホールは使いやすいのか、災害文化の観点から

考えるとヒントがありそう。

(2)聴講者からの意見

- 手話通訳者の常駐
- 車イスの足が入る下スソ空きの洗面台
- 結婚式などにも開放
- 障害者の会議室使用無料化
- トイレの手すりはずばらない非金属化
- 交通の利便性向上として、地下鉄駅を中心として自動運転バスの将来的運行で、周辺観光施設との回遊性向上に資するスペース確保も有効では
- 市障害支援窓口の常設
- 設計のプレゼンを拝見しました。広く自由な空間で素敵ですが、①避難誘導がしにくい ②体に不自由がある人に不便(車イスなどは良いけれど、子どもが飛び出してくる、など)安全面は少し不安になりました。また、運営と人がたくさん必要(人材の確保)だと思い、気になっています。
- 現状、聴こえる人の災害に対する取組みがある⇒障がいを持つ人の取組みを建物内にあると⇒聴こえる人にとっても理解してもらえるのでは。
- 財政的に大丈夫だろうか。勿論、議会の承認は OK なのか？市の財政不足で市民にしわ寄せはないか？本当に市民の声が集約されているのか？必要な施設なのだろうか？まだまだ不十分ではないか？
- 救急備品医薬品の常備
- 当事者が設計する準備段階で常時参加
- 老若男女いろいろな人が気軽に来て楽しめる施設
- 施設内レストランは支援法人のみが参加できるように
- G.H にはいるにたってどうなのか(お金のちがいがい)
- 閉館してでも入れる場所や休める場所が内部にほしい
- 夜、コンサートが終わったあとでも安全に帰れることも大事
- 東日本大震災を経てこの地に育つ「災害文化」を世界に発信し続ける強力なプログラムと推進体制が不可欠です！！
- 施設運営市民会議を作り、決定権を附与
- 駐車場 100 台は足りるのか？※先週雪の日の夜、川内萩ホールでコンサート後、国際センターの駐車場料金支払いで、すごい渋滞で、帰りの帰宅が大変でした。
- 女子トイレをたくさんつくってほしい。※いつもコンサート前後、休憩時間、いつも混みあうので。
- 建築費や維持費が安価な施設
- 自由に飲食できる場所
- 小中学校の見学時、昼食取れる場所があること(室内)
- 街から行きやすい場所になると良いなあ(歩いて、バスなど)
- コーディネーター・専門職員の存在

- 施設のルール 柔軟な対応変更
- 飲食スペースの充実を ※コンサートなど鑑賞後、余韻がある内に、音楽について気軽に語り合える場所がほしい
- 一人でいれる居場所
- 少し奥まった落ち着いたスペースが散らばっていてほしい
- 区のホールと役割がちゃんと異なっていてほしい(今はキャパの違いしかないように思える)
- コンサート終わっても、夜も楽しい雰囲気(お店的な、明るい)の場になるといいなあ
- 仙フィルの人たちのパート練習がちょっと見れるといいなあ
- ハード面のことで。公演等の鑑賞者等へのいわゆる施設の来場者が利用するためのトイレには、現存の施設にも配慮のある多目的トイレがありますが、公演等の出演者が利用できるエリア(バックヤード)にも同様の多目的トイレ等の設置が必要だと思います。(障害のある方が出演者となる事業が増えてきているから)
- 周辺の広瀬川の川辺の緑道とつながるスペースがほしい。施設に近づくほど音が聞こえてくる・・・みたいな。
- 大学生が音楽や作品を披露できる場
- 災害文化に学芸員がなじむのか分からないが、そういった人の配置または育成
- 音声文字ディスプレイの常設と使用無料化
- 障害施設法人の商品常設売店の保障
- 常設展示内容は市民当事者構成の委員会が行う
- 文化芸術－災害文化 それぞれの領域が横断している施設(の活動のための施設?)
- 設計・構想段階から市民当事者の委員会を設置
- 日本の音楽「邦楽」広めるため和室があってもよいのでは。 ※日本の伝統芸能(三弦・琴・尺八など)体験できるスペースがほしい
- 障害当事者が話し合う無料貸出し会議室を 4 つ
- 五感を刺激できる遊びができると良い。
- 24 時間運営されているゾーンがあって、練習・合宿ができるといいなあ
- 建物・施設建設の維持には、それなりのコストがかかる。その予算が市の税制状態にあるのか心配。そのつけが市町村民税の新設につながらない様、議論を市議会等でつくりたい。
- あまり奇抜なホールはいかがなものか? ※落ち着いた芸術鑑賞の場であってほしいし、後のメンテナンスにお金がかからないようにしてほしい
- 特に若い人が利用したくなる様になるといいなあ
- 仙フィルとその他もたくさん高水準のコンサートを引っぱってこれる館長さんorプロモーターに入ってほしいなあ
- 広瀬川の風を感じながら過ごせる屋内・屋外のスペースがあるといいなあ
- 建物のすぐ外にテラス(一部屋根があったり)や、オープンスペースで、自由に過ごせるといいなあ。そこから広瀬川にもおりていけたり。
- オープンしてからも今日の様な場が継続して、運営方法などを、ギロンし続けて、つくり

続けていけるといいなあ。

- さわる模型(ボタン押すと音声が出る)つくってほしい smtの入口にあるやつ
- 自転車でふらっと立ち寄れるような広めのスペースが道路側にほしい！！(駐輪場とつなげて)
- ミニコンサート的なものが沢山できる空間と運営の仕組みがあると良いなあ
- 災害に対応できる自家発電、宿泊対応もできる場に
- 金沢21世美術館のようなガラス張と白壁だと、トビラと壁の見分けがつかないのでやめてほしい ※あまりオシャレすぎると高齢者とはとびらの区別がつかないので
- 災害を経験した人が安心して来館できる、話したくなったときに話することができるような施設
- 西公園に出来る遊び場から足をのばしたくなる施設にしてほしい(遊び場サテライトにする)
- 子ども達が楽しく音楽や防災に触れ合えるエリアやイベントがあると嬉しい
- 柔らかい物が多くケガを心配しなくて良い空間(親がすこしホッとできる空間)←コーヒーが買えて飲めるスペースなど
- 駐車場が潤沢にあり、駐車場も入館料も無料だと有り難いです

(3) アンケート用紙に記載されたご意見

[①本日のイベントについてのご感想・ご意見をご記入ください。]

- いろんな意見交換が出来て良かったです、時間が短かった。又、設計がある程度出来た段階でも何回かやれたら良いかと思います。
- 楽しかったです。
- 音楽と防災というコンセプトによる施設を建築するのは、考えとしては良いと思うが、予算規模、その後メンテナンス等課題が残る。
- とてもいろんな話が聞けて楽しかった。
- 設計者が出席したのが良かった。災害文化のイメージがまだ分かりづらい。ディスカッション活発で多彩な意見が出て良かった。イベントの運営の配慮がされていて良かった。
- 集約して行ってほしい。まとまってつみあがって行ってほしい。
- 初めてのイベントとしては意見が出やすい設定。
- よかった
- 他の方のアイデア満載で刺激を受けた。
- 大変良い企画と思います。これまでもいくつかのワークショップに参加しましたが、今日のワークショップは、テーマが絞り込まれていたこともあり、意見に方向性があり良かったと思います。
- 進行役の方がとても良かった。だれでも言い合えるふんいきを作っていただきました。無知でも参加して良かったです。

[②複合施設の整備や仙台市の文化芸術施策全般へのご意見やご要望を、ご自由にお書きください。]

- 是非、良い施設となるよう私も含め皆で考えたいと存じます。
- しょうがいはいばしょがほしいです。早めに作ってほしいです。サードプレイスばしょがほしいです。
- 人材の確保が年々むずかしくなっていくなかで、公共施設の仕事に関わる人々の高齢化も深刻です。できるだけ、運営に人材が少なくてすむ建物作りも必要ではないでしょうか？(老朽化していけばいくほど、人の手が必要になってくる傾向があるので)又、望んでいるような公演・WS を実現できる人材の確保も早めにしていく必要があるのではないのでしょうか？特にコーディネートできる人材。
- ハード(建物施設)には、予算規模がどの程度の金額になるのか？これからの課題だと思う。施設維持のメンテナンス運用等、ひいては物価高騰のこの時代、市町村民税のアップ等にならない様に議論をつくして欲しい。
- 市の文化事業、年代を問わず、文化に触れ合える機会をこれからもたくさんやってほしい。せんくらなどまち全体のイベントを育てていくのはとても大切。
- 利用ハードルの低さは結局利用料やカフェのしきいしだいかも。
- 実現したらいい。
- 見た目もミリオク的でなぜその形になっているかのハード面。使用したり利用したりする事で発見と参加をしたくなるような運営と提案以上がある施設。今後も全体意見としてディ

スカッションする場をつくって下さい。

- 本施設の運営委員会を設計段階から立ち上げ障害当事者、市民委員を加えて下さい。
- 各テーブルに市の職員の方が入っているのは良かったと思います。ただ、私は 4 テーブルでしたが、市の職員の方がもう少し発言をしても良かったように思います。事前の説明の中で災害文化について、多少具体例を示していただければ、もう少しこの部分の議論が出来たのではないかと思います。非常に良い時間を、皆さんと共有出来たように思います。ありがとうございました。
- 市民活動団体が、利用できる「会議室」も作って欲しい。
- バリアフリーなのに NG があるのは残念。(障害者よりふつうの人の常識に優先されがち) 相談できる窓口があるといい。良い施設ができるようたのしみにしています。

(4) その他(WEB 上で寄せられた意見等)

[60代(青葉区在住)]

- 施設が完成して「ぜんぶ実現したら良いな！」の意見が反映できたことを、災害時こそ変わらず、休まないで続けている施設であってほしい(そのためには、仙台が再び大震災で被災しても、ハードとソフトの両面が堅牢で柔軟であること。避難訓練の思考バージョンのような、大災害で被災しても「変わらない運営をするためには」という内容をテーマに考える場を繰り返し続けることが必要)。
- 災害が起きた時に文化的な発露や受け皿の「場」は早期に生まれる。「場」を初めから想定していれば「そこに行けば文化がある」という拠点になり、情報の交差点になるだけではなく、被災者が潤いを求めて集まる、表現による支援が集うなど、文化が躊躇なく集まるための「約束の場所」になる。
- 仙台市が、いつまた被災するかはわかりません。それは日本のどの地にも言えることです。災害が起きても変わることなく運営することを最初からコンセプトとして宣言する。それはとてもシンボリックなことだと思います。そして、事業に反映し、発信し続け、他地域のモデルになる施設であってほしいと思います。

[30代(青葉区在住)]

- 文化芸術と災害文化が、構造的にどうしても縦割りになりがちだと思う。2 つの組み合わせによって何が生み出し得るか、検討チームを最初から作っておくなど、意識的に組織内もしくは事業内に組み込んでおくの良いのではないかな。
- 複合施設で働く人は、専門性を持っていることももちろん重要だが、分野横断的にコーディネートできる人がいることも大切だと感じた。
- トイレのサインについて、おしゃれさ重視だと、位置や性別がわかりにくくなりがち。ユニバーサル対応とするためにも、多様な人に「わかりやすい」ことも大切にしてほしい。
- じっとしていることが大変な、子どもや、障害がある人、その人たちをケアしている人も、周りに気をつかわずに創作したり、音楽やアートに触れたり、文化芸術を楽しむことができる、今回の 2/2 のイベントのような場が、常時あるとよい。
- 例えば毎月11日に、敷地内広場で、音楽を聞けたり、市が開かれていたり、子どもが遊べ

たり、文化・芸術に触れることができるなど、楽しく集まる場が定着することも、一つの複合施設だからこそできることではないかと感じた。(震災伝承を声高にうたわなくとも、定期的に楽しみながら、集ったり、思い出すきっかけがある)

- 複合施設の取り組みが、拠点を出発点としつつも、広瀬川～青葉山公園～西公園～定禅寺通なども活動フィールドにできると、音楽溢れるまち、災害文化活動の発信が、目に見える形となるのではないか。
- 震災メモリアル拠点の観点では、広瀬川・青葉山が近いことは、水や自然との付き合い方を実感を得て楽しみながら学べる、良いフィールドになるのではないか。
- 西公園に屋内遊び場施設が建設されるということなので、子どもを対象としたイベントを連携して行えるとよい。

[障害者就労施設事業所支援者]

- どんなイベントでも、点字のプログラムや点字案内チラシがほしい。
- みんな点字が読めるわけではないから、プログラムに音声コード(ユニボイスなど)がついているといい。
- 音声案内付きの映画があるが、それと同じように、舞台上のことを声で説明してくれるシステムがほしい。
- 今でも、盲導犬お断りだったり、盲導犬同伴しにくい場所がある。盲導犬(補助犬)フリーは必須。
- 見て楽しむではなく、「触って楽しめる」「音や声で楽しめる・できる」イベント企画を。
- ワークショップ型のイベントは、見える人対象のものが多く。見えない人も楽しめる・できるには?という発想がほしい。